

# ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について(四)

## —— 精神分析の胎動 ——

金 関 猛

医師としての経歴の始まり

フロイトがウィーン大学医学部に入学したのは、自然科学をきわめんとする志向があったからで、医師として身を立てようとして医学部を選んだのではなかった。そして、実際、医学部入学後、フロイトは研究者としての研鑽を積み、医学ばかりではなく、動物学、さらに哲学の授業を熱心に受講した。とりわけ、研究者フロイトにとっては生理学者ブリュッケとの出会いが決定的だった。フロイトはブリュッケを生涯にわたって師と仰ぐ。そして、ブリュッケの指導のもとで学生時代に発表した神経解剖学の論文は学界で高く評価され、多くの研究者がその論文を引用した。フロイトは医学部を卒業したのちも、ブリュッケの生理学研究所に残り、研究を続けた。しかし、給与は少なく、また、有給の助手の地位には有力な研究者―エクスマーとフライシユルーが就いており、当分、そのポストは空きそうになかった。すでに述べたとおり、<sup>(1)</sup>フロイトが生理学研究所をやめる決意をブリュッケに伝えたのは一八八二年六月一二日だった。それは、フロイトとマルタの婚約の一週間前のことだ。フロイトはウィーン大学卒業後、さらに

一四ヶ月ほど生理学研究所に残っていたのである。その後、フロイトは同年七月三一日付でウィーン総合病院第三外科のフォン・ディッテル(一八一五年―一八九八年)のもとで見習医として採用される。これをもって医師としての経歴が始まった。

### 一、ウィーン総合病院―見習医

ウィーン総合病院は現在もオーストリア最大の病院として存続する。その歴史は一七世紀末にまで遡る。神聖ローマ帝国皇帝レオポルト一世(一六四〇年―一七〇五年)が当時のトルコとの戦争による負傷者や貧窮者を収容する施設を開設したのがその始まりだった。その後、規模は拡大し、一八世紀前半には五〇〇〇人を収容する施設となった。しかし、貧窮者と病人を同一の施設に収容することには当然のことながら無理がある。皇帝ヨーゼフ二世(一七四一年―一七九〇年)は施設を分割し、貧窮院とは別に、一七八四年、「総合病院」を開設した。これが現在のウィーン総合病院の直接的な起源である。そして、この病院は「名高きウィーン医学学派の発展の前提<sup>(2)</sup>」となった。開設当初

からこの病院内にウィーン大学附属病院が併設され、そこで教育・研究がなされたのである。病院の医師の多くが、ウィーン大学医学部教授であり、講師や助手であった。しかし、総合病院が大学附属病院を兼ねていたわけではない。一つの病院内に二つの組織が並立していたのである。その事情をフロイトが説明する箇所が『婚約書簡』にある。

見習医となって二ヶ月ほど経った八二年一〇月五日付で、フロイトはウィーン大学医学部教授ノートナーゲル（一八四一年～一九〇五年）の私邸を訪れたときのことを報告する。ノートナーゲルは高名な内科医であるとともに、研究者としてもすぐれた業績があり、その名はノートナーゲル症候群などとして現在の医学に伝わる。ノートナーゲルがイエナからウィーンに赴任してきたのは八二年の冬学期で、教授就任記念講義は同年一〇月一日に行われた。<sup>(3)</sup>つまり、フロイトはウィーンに転居して間もないノートナーゲルを訪ねたのである。フロイトは医学部教授マイネルト（一八三三年～一八九二年）の紹介状を携えていた。フロイトはノートナーゲルの助手となることを望んでいた。それはフロイトにとって収入を得る手段でもあり、「生存のための闘争」(Bb.I. S366) だった。この大教授と言葉を交わしたことにフロイトはたいへん感激したようで、マルタにそのときの模様を詳しく書き送っている。フロイトが、ノートナーゲルに向かって、自分は「総合病院の見習医」(Bb.I. S368) であると告げると、教授はこう尋ねたという。見習医とは何なのかね。私はまだこの事情に通じていないものぢね。(Ebd.)

つまり、「見習医 (Aspirant)」とはウィーン総合病院での特殊用語で、

ドイツ出身の教授には理解できなかったのである。それに対してフロイトはこんなふうの説明した（これはマルタにも聞いてもらわなくてはならないと付言している）。

この病院には別々の二つの部門があります。附属病院と、それとは別のさまざまな科です。附属病院では教授が助手とともに学生に対して授業をします。科のほうでは、医長が医局員とともに患者の治療にあたります（ここに学生はおりません<sup>(4)</sup>）。教授は自分の助手を選べます。それに対して、医長は医局員を選ぶことはできません。医局員のポストが空くのを待っている医師であれば、誰でも医局員になれます。そして、待っているあいだは、私のように、見習医<sup>(5)</sup>と呼ばれるのです。(Ebd.)

このように二つの組織が並立していたのがウィーン総合病院の特殊性であった<sup>(6)</sup>。また、フロイトの身分である見習医制度もドイツにはなかった。ウィーン総合病院の複雑な制度がある程度は理解しておかないと、フロイトの医師としての経歴も把握しにくい面がある。

助手になりたいというフロイトの望みはかなえられなかったが、一週間後の一〇月二日にはこの教授の見習医に採用されている。つまり、フロイトは、見習医の身分のまま、第三外科のフォン・ディッテルからノートナーゲル教授のもとに移籍したのである。一〇月一日に書いたと覚しきマルタ宛の手紙でフロイトは「僕はノートナーゲルのところの見習医となりました」(Bb.I. S374) と述べる。さらに「僕の職にはいくらか給与がつかかもしませんが」(Bb.I. S374F) とどう希望的観測を表明している。つまり、逆に言えば、見習医は無報酬であり、

ドイツのもとでフロイトに給与は支払われていなかったのである。フロイトが楽観的な観測をしたのは、赴任直後からノートナーゲルが「つむじ風の」とく学部を駆け回り」(BbI. S.375) 医学部を改革し、とりわけ若手の医師の教育を刷新しようと努力していたからかもしれない。しかし、給与についてはフロイトの願ったようにはならなかった。有給となるのは翌八三年に医局員に出世してからである。

## 二、ヘルマン・ノートナーゲル

ノートナーゲルは日本の医学の発展にも寄与した偉大な学者である。明治一三年(一八八〇年)には、ノートナーゲル／ロスバハの共著『詳約薬物学』(鈴木孝之助抄訳)として、さらに明治二七年(一八九四年)には、宮入慶之助と宮本叔の共訳『能氏内科臨牀講義』が出版されている。宮入慶之助はミヤイリガイの発見で有名な寄生虫学者である。その宮入はこの翻訳書の「自序」で次のように述べる。

維也納大学は久しく欧州諸大学の上位にありて、而してノートナーゲル氏は実に今此大学に重きを負ふものなり。其大学の位斯の如く高く、而して其高きを持する所以のもの主として氏の頭上に懸かりたり「後略」<sup>(8)</sup>。

ノートナーゲルは日本の医学界でヨーロッパにおける第一級の学者として認知されていた。ウィーン大学の「位」が「主として」ノートナーゲルによって維持されているというのはいささか誇張のきらいがあるにせよ、実際、ノートナーゲルは医学史に名を残す大学者である。

内科医としての名声がヨーロッパ中にひろがっていたのに加え、神経学の研究でも知られていた。また血圧と疾病の関係を研究した最初の医学者にも数えられている。

ノートナーゲルは一八四一年にプロイセンのブランデンブルクで生まれた。ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム医学校で医学を学び、その後、ケーニヒスベルク大学で助手となった。一八六六年に普墺戦争が勃発すると、ノートナーゲルは軍医として従軍する。この体験はノートナーゲルに強烈な印象を刻んだ。戦場の街で目の当たりにしたことについて両親に次のように書き送っている(一八六六年七月三日付)。

ほとんどの家も、通りもたくさんの方傷者でいっぱいでした。オーストリア兵とプロイセン兵が入り交じっています。何百人もいて、どこも血だらけで、苦しみや空腹、喉の渴きを訴える悲鳴があがっていました。「中略」自分で戦場を見ないことには、戦争のおぞましさを理解することはできません。<sup>(9)</sup>「強調は原著者による」戦争を不正義とするのが一般観念であったとは言いがたい時代に、ノートナーゲルは戦場の「おぞましさ」をそれとして理解し、表現する感性をそなえていた。ウィーン大学教授就任講義では「善き人間のみが偉大な医師となりうるのです！」<sup>(10)</sup>と述べ、医師に求められるのは何より「人道精神」<sup>(11)</sup>(強調は原著者による)であると強調する。それは単なる美辞麗句ではなかった。後年「反ユダヤ主義に抵抗する協会」を設立したのも、そうした人道主義のゆえであった。一八九一年五月一四日の設立集会でノートナーゲルは出席者に次のように訴える。

反ユダヤ主義は恥辱であります。

その源は人間の本性のもっとも不純で醜悪な性格の奥底にあるのです。その本質は人間性と正義の廃棄です。その活動は高貴にして善良なるものの戯画であります。その帰結は風紀の紊乱、野蠻化<sup>12)</sup>です。

ノートナーゲルは反ユダヤ主義を人間性を冒瀆する不正義であると断罪する。権威主義的なドイツ語圏の医学界でその頂点に立つと言ってもよいノートナーゲルであるが、そのことと人道主義の理想を掲げることには矛盾はなかった。協会が設立されたのは、フロイトがノートナーゲルに出会ってから九年ほど経ってからのことだ。出会った当初はノートナーゲルの反人種主義のことは知らなかったかもしれない。しかし、人道を重んじるその人柄に触れることはできただろうし、それがこの教授に惹かれた一つの理由であったにちがいない。初対面で言葉を交わしたとき、フロイトはこの教授の話しぶりに「誠実さ」や「真摯さ」を感じ、「信頼できる」(BdI, S367) 人と確信したという。

最初の訪問から二ヶ月ほど経った八二年一月一日付でフロイトはマルタにこう書き送っている。

僕は今日ノートナーゲルのところに招かれました。それで僕は散財せねばなりませんでした。手袋をして、カフスを買ひ、チップもやらねばならなかったのです。だから、ねえ優しい女、急いで、少しばかりお金を送ってくれなうか。(BdI, S410)

どれほど誠実な人柄で、また、この手紙で続けて書かれるように、フロイトに対して「好意あふれる」(Ebd) 態度で接してくれるからと

いつて、やはりノートナーゲルは医学部正教授であり、学界の権威なのである。その私邸に招かれたとあらば、正装して出かけねばならなかった。ノートナーゲルはフロイトにとって雲の上の人だった。家は「新築で、まだラックのにおいがしていた」(BdI, S367)。食卓では「白いネクタイを着けた下僕が物言わぬ恭順の身振りで自動機械のように給仕する」(BdI, S252)<sup>13)</sup> のだった。プロイセン生まれのその人の外貌は「ゲルマンの森の人」(BdI, S367) だった。そしてフロイトにとって、ノートナーゲルは「僕らの運命を決めることができる男」(Ebd) でもあった。実際、ノートナーゲルはこれ以降フロイトの人生において大きな役割を演じることになる。フロイトはその助力があつて私講師となり、さらに教授就任の際にもノートナーゲルの後ろ盾があつた。しかし、それはまだ相当のちのことである(私講師就任一八八五年、教授就任一九〇二年)。

### 三、見習医から医局長へ

見習医フロイトに話を戻そう。先述のとおりフロイトは最初に第三外科のフォン・ディッテルの見習医に採用される。外科を選択したことについて、フロイトは「重い責任がかかるゆえに真摯な取組が求められる」と「これまでの作業のせいで手仕事には慣れてゐる」(BdI, S238) ことを理由として挙げている(八二年八月一日付)。重責を自覚して医療に向き合おうとするのはいかにもフロイトらしい姿勢だ。また、それまでのプレパレート作製などにおけるメスを用いた手作業が外科の治療に生かせると考えたのである。

一週間はどして、フロイトはマルタに、「幾度か」「メスを用いた小手術」(BdI. S.262) や「ギプス包帯の装着」(Ebd.) を行い、「二度、麻酔」(Ebd.) をしたと伝えている(同年八月七日付)。見習医になるや、外科医としての治療にとりかかっているのである。八月一二日付では、外科の「医長」と「医局員たち」(BdI. S.275) とごっしょにトルテを食べ、ワインを二本空けたと書いている。それは手術を受けた患者からの医長へのお礼の贈り物だった。こうしたことに關してフロイトは医療倫理に悖ると憤慨もせず、むしろ、医者は結構な身分だと喜んでゐる。その場では、以前には「特大ハム」(BdI. S.276) の進物もあつて始末に困つたという笑い話も出たという。フロイトは当時の医師たちの常識の範囲内でそれなりの仲間づきあいをしていたのである。ただし、フロイトは外科の「医長(Chaizid)」の名は一度も挙げてゐない。これを、フォン・ディッテルと同定したのは『婚約書簡』の編者である。このことからすると、上司にあまり親しみは感じていなかったのだろう。かといって反感の言葉もなく、上司を嫌って移籍を希望したのではない。フロイトがノートナーゲルを訪ね、その助手となることを希望したのは、そもそもフォン・ディッテルのもとでは医局員となつて給与を得る見込みがなかったからだ。それなしに見習医にとどまる意味はない。

フォン・ディッテルのもとで見習医を務めるあいだに日常の暮らしに一つ大きな変化が生じた。八二年八月二七日付でフロイトはマルタにこう書き送る。

今後、手紙を書くときは「総合病院Ⅹ、医学博士S・フロイト」

という住所を使つてゐた。 (BdI. S.327)

つまり、それまでフロイトはレオポルトシュタットで両親と同居していたのだが、このときはじめてその家を出て、病院での住み込みになったのである。フロイトはしだいに病院の人となつていった。

八二年一月二七日付の手紙の発信地は「病院の一般外来」(BdI. S.412) とされており、これ以降もこの「一般外来 (Journal)」のことが幾度か話題になつてゐる。そのときフロイトはノートナーゲルの見習医となつてゐた。見習医のフロイトはここに配属され、勤務中にその短い手紙を書いたのである。『婚約書簡』の編者注 (Ebd.) によつて、ウィーン総合病院を訪れる患者は、まず一般外来で診察を受けることになつてゐた。その診察にもとづいて、どの科で治療を受けるべきかが判断されたのである。一般外来の医療スタッフは三交代制で、二四時間いつでも患者に対応できるようになつてゐた。たいへん合理的な制度であるが、夜間勤務は一九時から翌朝の九時までということ、医師にとつて楽な仕事ではなかった。マルタも「あなたは一般外来に出ることがよくあるの？」(BdI. S.515) とフロイトを気遣つてゐる。ところで、このマルタの手紙は八三年七月一九日付で、そのときも一般外来での勤務が続いていたが、この時点でフロイトはすでに医局員に昇進してゐた。

八三年四月一七日付で「五月一日の医局員任命はもう確定です」(BdI. S.420) と書くとおり、八三年五月一日付でフロイトは医局員に採用されたのである。そして、その上司となつたのはマイネルトだった。マイネルトのもとでフロイトは見習医から医局員へ出世し、はじめて給

与が支給されることになった。

先述のとおり、ノートナーゲル宛の推薦状をフロイトのために書いたのはマイネルトだった。それを事前に読んでいたフロイトはマルタへの手紙にその内容を書き記している。

拝啓、御同僚。ジークムント・フロイト博士を、その価値ある組織学研究ゆえに衷心より推薦いたしますとともに、同博士の望みをお心にとめていただきたくお願い申し上げます。まもなくお目にかかれるものと念じつつ。テオドール・マイネルト (Bd.I, S.367)

『婚約書簡』でマイネルトの名がはじめて現れるのは、この八二年一〇月五日付の手紙である。フロイトは学生時代に一学期間マイネルトの講義に出席していた。そのことはのちにマルタにも伝えている(八三年四月二六日付)。それは精神医学についての講義であった。しかし、当時のフロイトがその方面に深い関心を寄せていた様子はない。その頃はブリュッケの生理学研究所での研究に没頭していた。そして、フロイトの研究成果は学界で広く知られ、また高く評価されていた。マイネルトもその研究業績に注目していたのだろう。かつての教え子だから推したのではなく、文字通り「その価値ある組織学研究ゆえ」にフロイトをノートナーゲルに推薦したものと思われる。

日付はないが、おそらく医局員となった直後に、フロイトはこんな戯れ言をマルタに書き送っている。

貴き王女様

帝・王立病院医局員<sup>55</sup>がお散歩のため門前にてお待ち申しております。

恐惶謹言

忠実なる僕

ジークムント

(Bd.I, S.427)

この頃(八二年九月から八三年六月まで)、マルタはウィーンに戻っていたので、二人は散歩にも出かけられたのである。そして、給与支給ともなう「帝・王立病院医局員」はフロイトにとつてのプライドだった。ただし、のちに述べるとおり、その支給額は結婚生活を成り立たせるにはとても及ばない額だった。

フロイトがマイネルトのもとで医局員となった経緯について『婚約書簡』で詳しくは語られていない。しかし、何より有給の医局員に昇進することが先決であったのだろうと推測される。医局員のポストが空けば、そこに就くことを最優先にせねばならないのが当時のフロイトの経済状態だった。また、その頃のフロイトが脳解剖学を志していたことがマイネルトに向かわせた理由でもあっただろう。フロイトを医局員として採用したマイネルトは、脳解剖学者として、精神科医として世界的な名声を博していた。その業績は今なお医学史に刻まれている。マイネルトの存在によって、ウィーン大学はヨーロッパにおける脳科学研究の拠点となっていた。

四、テオドール・マイネルト

マイネルトは、フロイトに対してノートナーゲル以上に強い影響を及ぼした人物である。フロイトの最初の著書『失語把握のために』には「批判的研究」という副題が付されている。そして、その「批判」

はマイネルトの学説と、それにもとづいて自説を展開した、マイネルトの弟子ヴェルニケ（一八四八年～一九〇五年）に向けられている。フロイトはマイネルト学説の批判によって、精神分析に向かって足を踏み出すことができたのである。否定的影響と言うべきであろうが、マイネルトは精神分析創出に大きな役割を果たした。

マイネルトは一八三三年、ドレーズデンで生まれた。三歳のときに両親とともにウィーンに移り、一八九二年に死去するまでそこで暮らした。ウィーン大学で医学を専攻し、その後、一八七〇年に同大学医学部員外教授、七三年に正教授となった。員外教授就任と同時に、総合病院に新たに設置された精神科の医局長にも任命された。ウィーン大学教授としては脳解剖学と精神医学の研究、教育に従事し、また病院では精神科の医師として治療にたずさわっていた。当時は、脳科学も精神医学も黎明期にあり、二つの領域は未分化だった。というより、神経の病気、脳病として精神病が把握され始めた時期だったのである。脳解剖学者としてのマイネルトの業績は「マイネルト基底核」、「マイネルト束」、「マイネルト交連」といった術語として、現代医学に伝えられている。

マイネルトの父親は作家、文芸評論家で、また、娘のドーラ（一八七〇年～一九四七年）も作家であった。ドーラは『テオドル・マイネルトとその時代』という父の伝記を著している。また、マイネルト自身も詩を書いていて、没後に詩集が刊行された。当時の多くの医学部教授がそうであったように、マイネルトの関心は専門分野を超えて文芸や芸術一般にも及び、そういった方面の人々との交際も活発だった。

たとえば、当時ウィーンで人気の高かった画家マーカルト（一八四〇年～一八八四年）はマイネルトの友人の一人だった。この画家が死去したときマイネルトはその脳の剖検を行った。娘のドーラによれば、それはマーカルトの「並外れた色彩感覚が父の特別な関心<sup>16)</sup>」を惹いたからだだったという。

マイネルトは気むずかしく、不安定な性格の人だったと言われている<sup>17)</sup>。確かにそうした面があったにちがいない。しかし、伝記を読むと、多少は不安定になって当然なほど、その人生には悲劇が連続した。

一八六一年にマイネルトはヨハンナ・フライシャー（一八三七年～一八七九年）と結婚する。ヨハンナは優れた知力の持ち主で―当時の女性としては珍しいことだが―結婚前にラテン語を含めた数カ国の外国語を学び、マイネルトが結婚を申し込んだときには、モード雑誌の編集者を務めていた<sup>18)</sup>。二人のあいだには長男カール（一八六八年～一八八四年）、長女ドーラともう一人の娘が生まれた。ドーラによれば、ヨハンナは妻として母として家族に愛を注ぎ、また、さまざまな社会活動に携わった。一八七三年の恐慌の際には、路頭に迷う女性たちを扶助しようと「ウィーン主婦協会」を設立し、その会長となった<sup>19)</sup>。マイネルトはそうした妻を熱愛し、その活動を支えていた。しかし、ヨハンナは四二歳で病没する。その後、マイネルトは知人への手紙でこう書いている。

私はヨハンナの死に際しても落ち着いていました。しかし、私の気持ちは、彼女が死んだままなのだということがわかったあとになつて籠<sup>たか</sup>が外れてしまいました<sup>20)</sup>。

別の人には、「脳を抜かれた蛙」<sup>21)</sup>のような気分だとも書いている。それでも、妻の没後三年ほど経ってマイネルトは再婚する。ドーラによれば、継母は子どもたちとよい関係にあったという<sup>22)</sup>。しかし、その二年後、「二四時間にも満たない病氣」<sup>23)</sup>ののち、長男カールが病死する。カールは、母の死後、父の再婚の前に、数週間にわたって幻覚に襲われ、ときには意識を喪失するという状態に陥ったことがあった<sup>24)</sup>。どこか精神的に不安定なところがあつた少年だったのであろう。その反面、音楽的な才能に恵まれ、子どもの頃からベートーヴェンを演奏し、即興演奏で人々を魅了したばかりではなく、作曲をすることもできた<sup>25)</sup>。当然、父の愛息であつた。その息子が一六歳で急死したのである。ドーラは「何年にもわたる悲嘆に満ちた苦悩を経て、ようやく父は回復できた」と書く。そんななかにあつても、マイネルトは精力的に脳科学者としての活動を続けたのである。しかし、悲劇はさらに続く。再婚で生まれた娘クリスティーネが八歳で死んだのである(九二年二月)。マイネルトはもはや耐えきれなかつたのだらう。その三ヶ月後、マイネルトは心臓病で世を去る。五八歳であつた。

フロイトがマイネルトの医局員となつたのは、マイネルトが再婚した翌年だった。比較的落ち着いた時期だったのであろう。この時点でフロイトはマイネルトの人柄についてとくに何も書いていない。世界的に知られた大学者のもとで仕事をするのは、誇りであり、喜びであつたにちがいない。ところが、マイネルトの医局員となつたのちに、フロイトはこんなことを書いている(八三年七月六日付)。

マイネルトは凡庸な精神科医でしかないのですが、我らの時代

でもっとも偉大な脳解剖学者ということになっています。(BdL. S.503)

フロイトがマイネルトに見ていたのは「世界でもっとも偉大」かどうかについては留保するような言い方をしているが、「脳解剖学者」であり、「精神科医」としてのマイネルトを評価していたのではなかつた。この時点でのフロイトの関心は精神医学ではなく、むしろ脳解剖学にあつた。フロイトはプレバラー特作製法の研究に熱中していた。マルタには「新生児の脳を徹底的に解剖してやるう」(BdL. S.487)と思っているなどと、恋人宛の手紙には似つかわしくはなさそうなことを書き送っている(八三年七月二日付)。フロイトにとつてはマイネルトの実験室で標本作製に取り組めることが重要なことだった。しかし、医学史研究者ヒルシュミュラーによれば、マイネルト自身にとつて「その研究の中心にあつたのは、神経解剖学的方法を精神医学の臨床にとつて実り多いものにしよつとする試み」<sup>26)</sup>であつた。この時代に脳の機能がわずかながらも明らかに、脳の病氣として精神病が把握され始めたのである。そして、マイネルトは脳科学の知見を精神医学に応用しようとした。マイネルトによれば、たとえば大脳皮質に多量の血液が供給されれば幸福感が生じ、逆に血液の供給が減少すると悲哀の感情が生じるという。そして、過剰な血液供給が長期間にわたると躁が、その不足が続くと鬱が発症するといふのである<sup>28)</sup>。もちろん脳内の血液の過不足で精神病を説明する、このような学説は現代医学の定説とは相容れない。しかし、脳内の何らかの異常が精神病を惹き起すという把握は根本原理として現代精神医学に継承される。というよ



り、その礎がここで築かれたのである。さらに、血液ではないにせよ、脳内の何らかの物質の―たとえばセロトニンやドーパミンの―過剰または不足により精神病が惹き起こされるといふ説は現在の医学において有力な仮説となっている。マイネルトの主張が今では素人目にも幼稚な学説に見えてしまうのはその時代の科学の発展段階ゆえのことだ。医学史の流れを概観すれば、やはりマイネルトは精神医学の進歩に大きな貢献を果たしたと言わねばならない。

フロイトとマイネルトの関係については、フロイトがパリのシャルコのもとへ留学したのち、ヒステリーに関する学説をめぐって二人が衝突したことがよく知られている。しかし、フロイトのパリ留学、シャルコとの出会いについて論じるには『婚約書簡』第五巻の刊行を待たねばならない。本稿においては、病院に入った当初のフロイトについてさらに論じることとする。

## 五、貧乏なフロイト

『婚約書簡』について(三)で書いたとおり、フロイトの父の商売は八三年の秋頃には行き詰まり、もはや安定した収入は得られなかった。そして、本稿で述べたように、フロイトは八三年五月一日に医局員に採用され、給与の支給を受ける身分となった。月給制で一ヶ月あたり三〇グルデンだった。さらに住み込みであったので、病院にはそのための部屋も用意されていた。父の商売の破綻の前に有給の職に就けたのはともかくも幸いなことだった。しかし、月額三〇グルデンでは、とても余裕のある生活は送れなかった。

ある文献にウィーンにおける一八八〇年頃の職種別の月給を記した簡単な表が載せられている。<sup>29)</sup>

ウィーン市参事会長	四八五グルデン
「上流家庭の」使用人	五〇グルデン
紡績工場の技能工(男性)	四〇グルデン
消防士	三六グルデン
紡績工場の技能工(女性)	二五グルデン

この表からすると、月収三〇グルデンというのは、男性の技能工場労働者よりも低い。またこの文献では、三人家族の労働者家庭の一月の支出(住居費、食費、光熱費)は「五〇〜八〇グルデン」とされている。さらに、「市街地の小住居」の家賃は月額「二二グルデン」<sup>30)</sup>である。月収五〇グルデン、三人家族の労働者が二二グルデンの住居を借りたとすれば、食費、光熱費に残るのは二八グルデンである。もし、医局員フロイトがマルタと結婚し、家賃二二グルデンの住居を借りたとすれば、あとは八グルデンしか残らない。三人の生活費の最低額が家賃を除いて二八グルデンであるなら、子どもがいなくても八グルデンでは到底生活できない。そもそも医師たる者が工場労働者と同じ暮らしはできない時代だった。フロイトの長男マルティンは子どもの頃を思い出して父は「フィアカーと呼ばれるしゃれた二頭立ての馬車に乗って往診に出かけ」、<sup>32)</sup>衣服は「最高の生地を用いて完璧に仕立てられていた」<sup>33)</sup>と書く。この頃はもう医院を開業し、医師として成功していたはずだが、マルティンによれば、その頃もなお「妻と二人で家計のやりくりを頭を悩ませ」<sup>34)</sup>ていなければならなかった。それでも医師

は立派な身なりで、フィアカーで往診するというのが社会通念であり、そうしなければ患者の信頼も得られず、仕事が成り立たなかったのである。ジョーンズによれば、フロイトが結婚当初、一ヶ月に必要としたのは三〇〇グルデンであった<sup>85</sup>という。それだけの収入の見込みがなければ結婚はありえなかった。

ちなみにドイツの大学教授の収入について調査した文献によると、ボン大学法学部のある正教授の年収は初年度（一八八〇年）で一〇、〇〇〇マルクであった<sup>86</sup>という。『婚約書簡』編者注によると一八八四年で一〇〇マルクが六〇グルデンに換算されるので（*Bd3* S145）、それに従えば、一〇、〇〇〇マルクは六、〇〇〇グルデンにあたる。月額にすると五〇〇グルデンである。これは初年度の額であり、もちろん、その後の業績に応じて昇給があった。ドイツとオーストリアでは経済面で異なる事情はあっただろう。しかし、ドイツからウィーンへの大学教授の赴任は頻繁にあったので、給与面でウィーンが不利なはずはない。ノートナーゲルやマイネルトは当時のフロイトにとって経済面でもまさに雲の上の人であった<sup>87</sup>。

フロイトは自らを「金人間（*Geldmensch*）」（*Bd2* S393）と呼び、実際のべつ金銭のことを話題にしている。八二年一月二日付の手紙には一週間の出費報告が載せられている。「僕は浪費家なので、監視してもらわねばならぬのです」（*Bd1* S400）と云うのである。そして、今後も週間出費を「毎週、君に報告する」（*Epd*）とまで書く。しかし、マルタにとっては「監視」といっても心配が増えるばかりで、なすすべはないのだから、「幸いにも」と言うべきだろうが、週間出費報告の

提出は実現しなかった。

週間出費を報告する八二年一月と言えば、見習医で無給の時期である。表には収入の欄はない。まだ、父の援助を受けていたのである。この出費表によると、毎日の昼食代が六〇〜七六クロイツァー（一グルデン＝一〇〇クロイツァー）。日曜日に昼食の出費がないのは家族で食事をするからだろう。また、毎日葉巻を買っており、一月一四日に葉巻に使った二六クロイツァーについて、「多すぎて有害」（*Epd*）と自分で認めている。しかし、これ以降も葉巻には毎日ほぼ同程度の出費をしている。フロイトは晩年に心臓発作を起こすまで喫煙をやめなかった。自ら「有害」と認めるとおり、それは一九二三年に見つかった口腔癌にも影響はあっただろう。また、出費表には、ほぼ毎日チョコレートなどの菓子代が記入されている。一月一六日にはチョコレートに一〇クロイツァーを使ったことについて「ブローイヤーのところに行くとき、通りでもとても空腹だった」（*Bd1* S401）と書いている。二日後にも「僕はいつも通りで食べるんだ」（*Bd1* S402）と書いて、二〇クロイツァーと記入している。チョコレートを嚙りながら街路を歩くという光景は、気難しい天才の姿にはそぐわないが、見習医のフロイトにとってそんなことはごくあたりまえのことだったのである。

この手紙には金銭に関わるさらに重要な記述がある。冒頭でフロイトはこのように書く。

僕は友人のブローイヤーから「ブローイヤー自身が自分を友人だと言ってくれるので、僕もそう呼んでよいわけですが」借金をしました。（*Bd1* S400）

プロイアーからの借金のことがはっきり書きつけられているのは、これがはじめてのことだ。このとき以降、フロイトはプロイアーから長きにわたって金を借り続ける。そして、それは二人の決裂を招く一因となった。

出費表を載せる手紙を送ってから二年二ヶ月経った八四年一月七日の手紙にフロイトは「このときはすでに収入があったので——收支報告書載せている (Bd3, S76)。期間は明記されていないが、年明けから一七日までの収支であると推定される<sup>88</sup>。収入欄を見ると、給与は三〇グルデンである。そのほかに「新聞」一七グルデンと書かれている。その二週間前（一月三日付）の手紙でフロイトは「新聞から三ヶ月分」(Bd3, S36) としつて七グルデンを受け取ったと報告する。フロイトは学術誌 (*Wiener Medizinische Wochenschrift*) に書評を載せて原稿料を稼いでいたのである。さらに「患者」五グルデンとあり、患者から謝礼を受け取っていたようだ。そして、プロイアーからの借金が五〇グルデン、さらにハンマーシュラーク（一八二六年～一九〇四年）の名で五〇グルデンと記載されている。以上、借金も含め一五二グルデンが収入である。

ハンマーシュラークはフロイトの通っていたギムナジウムの宗教—ユダヤ教—の教師で、フロイトはこの先生を敬愛しており、卒業後も親交があった。『全集 (GW)』には、旧師の死去に際して捧げられた追悼文が収められている。<sup>89</sup> 八四年一月一〇日付の手紙では次のように書く。

老先生「ハンマーシュラーク」が教えてくれたところによると、

「中略」ある富豪が相当な額のお金を先生に託し、それにふさわしい貧しい者に与えるようにと言ったのです。先生は僕を推薦し、そのお金をくれると言います。「中略」僕のことを気にかけてくれるのは、これがはじめてではありません。大学時代に、先生は今回と同じく自ら進んで僕を困窮から救い出してくれました。(Bd3, S56)

一月十七日の手紙に収入の項でハンマーシュラークの名で五〇グルデンとあるのは、ここで言われる「ある富豪」からハンマーシュラークに渡った金だろう。ハンマーシュラークはフロイトに向かって、「若い頃に極貧を経験したので、金持ちから支援してもらうことを恥とは思っていない」(Ebd.) とつねづね語っていたという。そんなことを聞かされていたせいか、フロイトには借財にそれほどの抵抗感はなかった。八三年七月一八日付では、プロイアーが「山ほどのお金を押しつけてきた」と書き、さらに続けて「それがプロイアーでなければ、恥じ入ってしまうところ」(Bd2, S34) だと記している。二人のあいだにそれだけの友情や信頼があったのは確かだ。しかし、借金に恥を感じなくなる人間関係は、あまり健全とは言えないだろう。

先述のとおり、フロイトは「浪費家」を自認する。一月十七日の収支報告からすると、極端な無駄遣いをしているわけではないにせよ、明らかに儉約家ではない。収入一五二グルデンのうち残ったのは八グルデンにすぎない。ただし、支出のうち二五グルデンは「実家に仕送り」(Ebd.) とあり、両親や弟妹の扶養にあてられている。また本代の二〇グルデンが目立った出費である。そのほか「新しいズボン」や「仕

立屋」(Ebd.)に合わせて二〇グルデンを使っている。ハンマーシューラクからの特別な収入があったので、この際、衣服も揃えておこうとしたのかもしれない。さらに「シェーンベルクと二度の贅沢な夕食」(Ebd.)、「二グルデン、「一日二度のカフェ」(Ebd.)に計七グルデン、「喫煙」(Ebd.)に計四グルデンというのは確かに無駄遣いではあろう。ささやかな楽しみとも言えるが、借金なしにはこうしたことは成り立たない。フロイトには無理をして生活を切り詰めようという意志はなかった。この手紙では「僕と家計を切り盛りするのはどれほどむずかしいかわかるでしょう」(Bd.3 S.77)と居直っている。

このうち臨時的に上級医局員として月給四五グルデンが支給された期間はあったが、それを除けば総合病院を退職してパリに留学するまでの二年四ヶ月ほどのあいだ、フロイトは月給三〇グルデンの医局員を務めていた。さらに収入源としては、医学生相手の家庭教師の代金、書評や論文の原稿料があり、そして、ブローイアーからの借金―毎月五〇グルデン―が続いた。こうした経済状況のなかで、フロイトは医師としての修行に勤しみつつ、また、マイネルトの実験室でプレパラート作製の研究に、またのちにはコカイン研究に熱中する。フロイトにとっての正義は学問研究であり、それによって、良くも悪くも借金は正当化されたのである。「金持ちから支援してもらうことを恥とは思っていない」というハンマーシューラクの言葉がフロイトにとって意味をもちえたのは、支援が研究生活を成り立たせていたからだ。研究と結婚がフロイトの心を占めていた。しかし、両者を経済的に自力で実現させる方策は見いだせなかった。フロイトにとって結婚生活はまだ

まだ先延ばしにせざるをえなかったのである。

#### 六、医局員フロイト

フロイトがマイネルトのもとで医局員を務めたのは五ヶ月にすぎない。八三年一〇月一日にツァイスル(一八一七年―一八八四年)のもとに移ったのである。ツァイスル教授は梅毒治療の専門家として世界的に知られていた。移籍したのは、マイネルトとの折り合いが悪くなったからでも、とくにツァイスルに惹かれたからでもなかった。フロイトはブローイアーに自分の将来についてこんな相談をもちかけたという(八三年九月一九日付)。自分がほんとうに関心があるのは「神経病理学」(Bd.2 S.262)だが、それだけにこだわっているのは「幅広く修行を積ませるようになるかわからない。その領域も含めて、「幅広く修行を積んだ医者になって、赤ん坊の取り上げも、抜歯も、脚の骨折治療もできる人間になれば、田舎でも、イギリスでも、アメリカでも、月にだっで行ける」(Ebd.)、そうなれば結婚も現実的になるといっているのである。こうした考えを、ブローイアーは「理性的」(Ebd.)であるとは認しにくれた。ドイツ語圏では現在でも、体調を崩せば町の一般医の診察を受け、さらに必要があれば、そこで紹介された専門医で受診するのが通常である。フロイトの念頭にあったのはこうした開業医だった。ブローイアーと話をしたのが一八日で、その翌日、マルタに手紙を書く前にフロイトはさっそく病院長のところに行つて自分の望みを伝えている。そして、病院長の提案に従つてツァイスルの科への移籍を決め、さらに空気ができしだい、神経科に移るといふ話を決めたという。神経科の

ちに眼科、さらに可能であれば外科で研修するという計画を立てている。この手紙ではツァイスルのところにとどまるのは「せいぜい三ヶ月」(Ebd.)と書いているのだが、実際、移籍三ヶ月後の八四年一月一日には神経科に重点を置く医療第四科に移っている。そして、ここに一年以上籍を置いていた。その後、計画どおり八五年三月一日に眼科に移籍し、そして、同年八月に総合病院を退職するまで、そこに医局員として在籍していた。結局、外科には移らなかつた。以上が総合病院におけるフロイトの医局員としての経歴のあらましである。

八三年九月一九日付のマルタへの手紙で、フロイトは病院における今後の研修の展望を告げるとともに、「マイネルトの実験室との縁は切らないし、そこから講師職を狙って頑張ります」(Ebd.)と述べている。医局は離れても、マイネルトはフロイトにとって大事な存在だった。研究者としてキャリアを積むにはマイネルトの実験室がどうしても必要だったのである。フロイトが情熱を注いでいたのは、神経病理学研究の基盤となる脳の顕微鏡研究であり、またそれを成り立たせるパラート作製の新技法だった。八三年七月一日の手紙では「ぼくは脳解剖学とその方法で頭をいっぱいにしています」(Bd.I, S.519)と書く。しかし、その反面、未来の精神分析医フロイトとしては奇妙なことだが、マイネルトの精神病患者には興味は示していない。脳解剖学に夢中だと告げる手紙を書いた翌日、フロイトはこう明言している(八三年七月一二日付)。

僕は担当の狂人たちにはほとんど関心がありません。(Bd.I, S.520f.)  
また、八三年八月七日付では、「狂人たちはもうむちゃくちゃです。

彼らの愚かしい騒ぎのことを全部話して聞かせるなんてことはできません」(Bd.2, S.117)と書く。マルタもこれに対して「あなたが狂人との生活に、狂人との生活だけにわが身を捧げようなんて思っていないことがうれしいわ」(Bd.2, S.133)と応じている(八三年八月一四日付)。「狂人たち」と訳した語の原語はNarren。本来は「愚者、愚か者」を指す語である。当時においてそれは一般的な用法であり、たとえば、総合病院の精神科の病棟はNarrenstube (狂人塔、愚者の塔)と呼ばれていた。この語に精神病患者に対する差別的な感情が込められていたのは言うまでもない。のちのフロイトは、患者から学びながら精神分析を創出するという姿勢を貫き、たとえば自分のヒステリー患者ツェツィーリエ・M夫人を「師匠」<sup>(40)</sup>とさえ呼ぶ。しかし、そうしたフロイトの姿はここにはない。マイネルトの患者には、精神病患者や神経症者が入り交じっていただろう。そのなかには対話可能な者も不能な者もいただろうが、フロイトも含めて患者と対話を試みようとする医師はいなかった。当時はまだそうした発想がなかったのである。患者は「狂人」で、「愚者」でしかなかった。精神病患者ははまだ人間扱いされていなかった。精神病についても神経症についても医療面での理解は行き届かず、マイネルトに限らず、誰も有効な治療法を開発してはいなかったのである。そもそもフロイトにとってマイネルトは「凡庸な精神科医」でしかなかった。マイネルトが脳解剖学と精神医学の橋渡しを試みた最初の学者であり、そのことにより現代精神医学の礎を築いたという歴史的な功績があったにせよ、精神科医として実際に精神病を治療することはできなかった。そうした精神医学にフロイトは情熱を注げなかつ

たのである。

一般医を目指したとはいえ、フロイトが医師として重点を置こうとしたのは神経科だった。マルタ宛の手紙では「神経病や強直痙攣」(Bd.2 S.262)の治療に携わる科に長くどまりたいと述べている。脳神経の異常による麻痺などを治療の対象とする科での研修を希望していたのである。実際、フロイトはのちに脳性小児麻痺に関する著書を著す。また、最初の著作『失語把握のために』も脳神経の異常による言語の喪失という症状について論じる書であった。脳性麻痺や失語を扱うのが神経科であり、それは精神科とは異なる領域である。この時代には、脳の局所的な損傷がどのような身体の麻痺を惹起するか、あるいはまた、どういったタイプの失語を惹起するかといったことがしだいに明らかになり始めていた。精神科の場合とは違い、神経科であれば一定程度の根拠に基づいた合理的な治療が可能だった。また、脳解剖学の知見が治療に役立つと期待することもできる。そして、総合病院の神経科で研修を積んだフロイトは、さらにそうした研究を深化させるべく、八五年秋にパリのシャルコのもとへ留学する。この偉大な神経学者のもとでフロイトが目の当たりにしたのは、脳の器質性の疾患がなくとも拘縮がヒステリー症状として生じること、そして、その症状は催眠術によって惹起されうることだった。フロイトは、ヒステリー患者が知性や思考力、また倫理性をそなえた対話可能な人々であることをしだいに学んでいく。そうした人々との対話を通じてフロイトはしだいに精神分析への道を歩み始める。しかし、ウィーン総合病院での医師としての研鑽がそこに直結していたわけではなかった。むしろ、

当時の脳科学や精神医学によって心の病の治療は不可能だという洞察が、精神分析の創出に結びついたのである。

なお、本研究は科研費23370086の助成を受けたものです。

#### 注

- (1) 金関猛『ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について』、『岡山大学文学部紀要』、第六六号、二〇一六年六月、三六ページ。
- (2) Felix Czeike, *Historisches Lexikon Wien*, Bd. 3, Kremayr & Scheriau, Wien 2004, S.592.
- (3) Erna Lesky, *Die Wiener medizinische Schule im 19. Jahrhundert*, Hermann Bohlaus, Graz 1978, S. 314.
- (4) 『婚約書簡』の編者はフロイトの説明のこの部分に注を付し、「これはウィーン総合病院の特殊な点であった」と述べている。編者によれば、附属病院は教育省の科は保健衛生審議会の管轄下にあった。(Bd.1, S.371)
- (5) 「見習医」と訳したAspirantは辞書的には「志望者、志願者；任用候補者」(小学館『独和大辞典』)を意味する。Aspirantは医局員を志望し、その任用候補者となるのである。
- (6) 下坂幸三は『世界大百科事典』(平凡社)の「フロイト」の項で病院名を「ウィーン大学付属病院」とし、「日本の翻訳書はすべて(一般病院または(総合病院)と直訳しているが適切ではない」と書いている。しかし、本文で記したとおり、この病院は大学附属病院としての性格は有しているが、そうとは呼べない面もあるので、やはり「ウィーン総合病院」と訳するのが適切である。
- (7) 日付はないが、編者は一八八二年一〇月一三日に書かれたとしている。
- (8) 『能氏内科臨牀講義(第一)』宮本叔、宮入慶之助訳、半田屋医籍、明治二十七年、巻頭頁(頁数無)。漢字は新字体に変えた。
- (9) Max Neuburger, *Hermann Nothnagel*, Rikola Verlag, Wien 1922, S.46.
- (10) Ebd., S. 146.
- (11) Ebd., S. 147.
- (12) Ebd., S. 236.

- (13) これはバーネットの妻の両親のところへ招かれたときのことを伝える文であるが、「こうしたこと」を「はじめて体験したのはノートナーゲルのところだった」(Bd.2, S.242)と書かれている(八三年九月一五日付)。
- (14) ノートナーゲルは「もし外科でポストを得る見込みがあるなら、それを蹴るようなこととしてはいけない」(Bd.1, S.368)とフロイトに言ったのだが、フロイトはノートナーゲルのこの言葉の「見込みがあるなら」の後に「(そういう見込みはない)」(Ebd.)とこう一文を挿入している。
- (15) 「帝・王立病院医局員」の原語はk. k. Sekundararzt。k. k. はkaiserlich-königlichの略。これは、オーストリア帝国＝ハンガリー王国、あるいは、オーストリア＝ハンガリー二重帝国を意味する。
- (16) Dora Stockert-Meynert, *Theodor Meynert und seine Zeit*, Österreichischer Bundesverlag, Wien 1930, S.111.
- (17) ナヤニ<sup>24</sup>Henri Ellenberger, *Die Entdeckung des Unbewussten*, Verlag Hans Huber, Bern 1973, S. 590f.参照。
- (18) Albrecht Hirschmüller, *Freuds Begegnung mit der Psychiatrie*, edition diskord, Tübingen 1991, S. 95.
- (19) Dora Stockert-Meynert, *Theodor Meynert und seine Zeit*, S. 32.
- (20) Ebd., S. 75.
- (21) Ebd., S. 76.
- (22) Ebd., S. 119.
- (23) Ebd., S. 73.
- (24) Ebd., S. 93.
- (25) Ebd., S. 99.
- (26) Ebd., S. 73.
- (27) Albrecht Hirschmüller, *Freuds Begegnung mit der Psychiatrie*, S. 109.
- (28) Ebd., S.112.
- (29) Erik Eysl, *Von der Eule zum Euro*, Verlag Hermangorras / Mohorjeva založba, Wien 2005, S.136.
- (30) Ebd.
- (31) Ebd.

- (32) マルティン・フロイト『父フロイトとその時代』、藤川芳朗訳、白水社、二〇〇七年、三三三頁。
- (33) 同右、三三三頁。
- (34) 同右、三三三頁。
- (35) Ernest Jones, *Sigmund Freud*, vol. 1, p. 166.
- (36) Christian Maus, *Der ordentliche Professor und sein Gehalt*, V&R unipress, Göttingen 2012, S. 163.
- (37) ウィーン大学教授で、外科医であったビルロートには「一八六八年」に「個人診療で」「およそ一万四千グルデン以上」の収入があったという(ディートマル・グリーザー『ウィーン、我が心の故郷』、平田達治・友田一夫訳、二〇一五年、大修館書店、二〇五頁)。
- (38) 出費として、薬巻に「毎日二五クロイツァー」、合計「四グルデン」とあるのべ、このことからすると「六日分」ということになる。また、「一日二度のカフェ」が「四〇クロイツァー」で、その合計が「約七グルデン」とあるので、単純に計算すると(700÷40)「一七・五日分」ということになる。「新年の出費」と書かれた項目もあるので、おそらく年が明けてから、この手紙の書かれた一月一七日までの収支報告なのだろう。
- (39) Sigmund Freud, *G.W. Nachtragsband*, S. 733.
- (40) 一八九八年二月八日付のフリース宛の手紙 (Sigmund Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, S. Fischer, 1986, Frankfurt am Main, S. 243)。